

Metro 第 35 号

「ブレグジット：今までと違ったアプローチか？」

投稿文（日本語訳文）

2019年9月4日掲載

東郷和彦

Metro でブレグジットについて取り上げるのは早 3 回目になる。そのたびに、事態は重大な展開をしているように見える。私は、2018 年 9 月の第 13 号で、メイ首相のアプローチが「底辺労働者の根源的な不安の解消と自由貿易の拡大を同時に実現する新しい EU のビジョン」発見につながる期待を書いた。

しかし 2019 年 4 月の第 28 号は、下院による 3 回の離脱協定否決をうけて、EU との間でようやく 10 月 31 日までの交渉期間の延長が成立した直後に執筆された。背景として、英独仏の間の亀裂の深化と、トランプと独仏主導による EU との対立の深刻化が起きていた。

結局のところ、離脱協定成立のめどが立たない責任をとってテレサ・メイは 6 月 7 日をもって首相職を辞任。ボリス・ジョンソンが 7 月 24 日、2016 年の離脱国民投票以来 3 人目の首相として登場した。

ボリス・ジョンソンは、2016 年の国民投票で「離脱支持」を鮮明に表明して以来、「離脱派の顔」として知られている。7 月 24 日の首相就任演説でも、離脱条件を有利にするための再交渉を EU とするとしつつも、「それができなくても 10 月末には離脱する」ことを強調。25 日の初閣議の冒頭「私たち全員が、10 月 31 日の EU 離脱に責任を持つ。『もし』も『でも』もない」と発言。ここに「合意なき離脱」が現実的選択肢の一つとしてはっきりと登場したのである。

このような強硬姿勢を反映してか、EU との話し合いは当初からギクシャクしている。8 月 19 日ジョンソンはトウスク EU 大統領に、メイ首相が結んだ離脱協定案の中のアイルランドに関する「バックストップ合意」（アイルランドと英領北アイルランドとの間の厳しい国境管理を復活させないための打開案が見つかるまでは、英全土を EU の関税区域に残すもの）の廃棄を求める書簡を送付。トウスク氏が協定再交渉に応じない姿勢を明らかにすると、20 日には「9 月 1 日以降最重要会議以外の EU との会合には出席しない」と発表した。

緊張含みの中で 8 月 21 日ジョンソンはベルリンでメルケルと初会談、メルケルはアイルランドの「バックストップ合意」に関して「問題解決案を 30 日以内に英国が示すこと」を提案、22 日のマクロンとのパリでの会談でも、マクロンはその可能性を否定せず。ジョンソンは「30 日の検討期間があることに満足している」と応じている。しかし、そのような案があるのか否か、全く不明であ

る。

他方において 25 日、G7 サミットの際に行われたトランプとの初会合は、実に順調な滑り出しをしているように見える。会談冒頭トランプは「彼は素晴らしい首相になるだろう」「彼は私のアドバイスなど要らない。英が EU から離脱する任務に適任だ」と述べている。EU 離脱後の経済安定の柱としてジョンソン氏は「米英 FTA の早期締結」を必須としているようであるが、これについても「極めて迅速に合意できる。問題があるとは思えない」と支持を表明している。

「今までと違ったブレグジットのアプローチ」は、「自国第一主義・反多数国間主義」で一致する新しい米英大西洋関係が答えなのかもしれない。しかしながら、英国内政治では緊張が激化している。8 月 28 日ジョンソンは下院を 9 月 13 日から 10 月 13 日まで閉会にすると発表した。離脱加速化のための政策である。野党はそのような行動を不可能にするための法案を準備している。ブレグジットの命運は、これからの事態の推移を見守ることによってしかわからないように思う。